

「十月九日に栄治じいちゃんは七十五歳になる。みんなからみるとすごい年やろ」と徳平は重々しく言った。

「すごい過ぎてピンとこない」と隼人。

「えーと、ウチのばあちゃんと同じくらいかなあ」と負けずに航平。

「それでどんな協力をするの」と隼人が訊いたので、徳平はさも内緒話のように声をひそめた。

「栄治じいちゃんは毎日、昨日橋のところに行つて、夕陽に向つて呼びかけると。栄治じいちゃんが呼びかけたあと、同じことをわしらが声を合わせて呼びかけるんや。それだけ。それだけで栄治じいちゃんはものすごい喜ぶ。何よりうれしいびつくりプレゼントもろた、と栄治じいちゃんは絶対に言う。いつも一人ぼつ

じないみたいなんんかの」

『おまじない』？』

「ああ、大切なおまじないや。時々、橋のところで栄治じいちゃんが言うてるのは噂で知ってるな。そのおかげでみんな幸せに暮らせているようなもんや」
男の子二人は首を傾げてあまり納得したようではなかった。

『「ユーチー」って何？』と隼人が訊いたので、そこだとばかり徳平は少し声を強めた。

『「ユーチー」というのは、夕陽のニックネームや。隼人のニックネームは『ハヤボウ』じゃ、航平のニックネームは？』

航平がもじもじしていると横から隼人がわかった、というように顔を輝かせた。

ちで夕陽に呼びかけとるからの。仲間ができるとうれしいんや」

「昨日橋のところ？」と隼人が用心しいしい尋ねた。

「夕陽に呼びかけるんか。それ、かつこいいか」と航平もけん制みだ。

「栄治じいちゃんが喜ぶんやで」と徳平は一押しした。

二人は少し考えていたが、隼人が口火を切った。

「かつこ悪くても、本当に栄治じいちゃんが喜ぶことならしてもいいけど、なんて言つたらいいの」

「簡単なことや。『ユーチー、カエツテコー』と言えええんや」

この答えに航平が不思議そうに首を傾げた。

『「ユーチー、カエツテコー」ってどういう意味？』

「ま、なんというか、マントラというか、えー、おま

『「コウチャン」だろ。そして徳平じいちゃんは『トクサン』なんだ。それで夕陽のニックネームは『ユーチー』なんだ」

隼人はもう一つ質問した。

「いまさつき、みんなが幸せに暮らせるのは栄治じいちゃんのおかげだ、と言つたのはどういう意味なの」

徳平はつくづく隼人の頭の回転のよさに舌を巻いた。この子は将来、見込みのある子になると思いつつ、2 説明をした。

『夕陽よ、帰って来い』と言つても、夕陽は帰って来ないで沈んでしまい、夜になる。お日様も、夜はみんなと同じようにちと休まにやらならんぞ。でもな、お日様は帰って来いという言葉をちゃんと覚えとつて、朝になると朝陽に姿を変えて帰って来る。栄治じいちゃ

んがの、お日様が忘れんように帰って来いと呼びかけるからや。それで朝になると明るくなってみんな学校に行ったり、仕事ができたりするようになるというわけや。だからみんなが幸せに暮らせるのは栄治じいやんのおかげといつてもええくらいや」

隼人と航平は、ああそうかと納得したように大きく頷いた。

それじや、みんな、栄治じいやんの誕生日には夕陽が沈む頃、昨日橋に集まって呼びかけてくれるか、と徳平が頼むと男の子二人はうれしそうに引き受けた。

「よつしや、みんな田陣を作って手を重ねようの」
隼人と航平と徳平が手を重ね合わせた。徳平はふと気付いて、夕子呼び寄せ、夕子の小さな紅葉のような可愛い手もその上に乗せた。

「やだな。自分の誕生日を忘れてる」

「あんまり何回も誕生日がきたので忘れたんだね」と航平は訳知り顔だ。

「栄治さん、今日はおまえさんの七十五歳の誕生日や。そんでの、みんな集まって昨日橋のところで祐一さんが帰って来るように一緒に声を合わせて願うことにした。それが栄治さんへの誕生日プレゼントになると思うの」

栄治はびっくりしたようにみんなの顔をまじまじと見詰めた。そして「そうか、そうか、みんなも一緒に言うてくれるんか。こんなうれしいことはない」と満面の笑顔で喜んだ。

徳平は三人の子どもの方を振り向いて、な、わしの言うた通りだろ、と得意そうな顔をした。

「わしが『約束や』と声を上げるからの、そしたら『おーっ』と答えてみ」と言った。みんなは真剣な表情だ。

「約束や」
「おーっ」と隼人と航平は勇ましい声をあげた。夕子は三人を見上げて目をぱちくりさせた。

十月九日がやつてきた。徳平は夕子の手を引いて

隼人と航平を誘った。そしてみんなで栄屋に寄った。栄治は四人が揃って予告もなく来たので目を丸くして驚いた。

「いったいみんな揃って何事や」
「栄治さん、今日は何の日かの」
「何の日いうても……何の日や？」
隼人がおかしそうに笑った。

「それではぼちぼち昨日橋のところに揃って行きますか。ちようど夕焼けがきれいな時分やろ」

徳平が言つて、総勢五人は昨日橋のところに歩いて行った。
「まずは栄治さんがお手本を見せてくれんかの」と徳平が促すと、栄治は目をしばたいてから夕陽の方向に向かつて大きな声で言った。

「祐一、帰ってこーーい」
徳平、隼人、航平は手でメガホンを作つて声を揃えて叫んだ。

「ユーチー、カエッテコーーい」
すると一拍遅れて、夕子が糸のように細い声を出した。
「かえってこーい」

初めて聞く夕子の声に徳平は驚き、また感激した。

「おお、夕子。おお、夕子。おまえも栄治さんのために言うてくれたんか」と徳平は夕子を抱き上げ、やさしく頬ずりした。

(以上4月2日放送分)

(完)

勤め帰りの人たちや下校中の中学生や高校生が珍しそうに、あるいは訝しそうに昨日橋のところにいる五人をちらちら見て通ったが、隼人と航平は通行人の好奇な目など少しも気にならないように得意そうに胸を張っていた。

夕陽に照らされた栄治の赤く染まった顔は満足感に包まれている。

太陽はビルの間に静々と沈んでいき、雲に映えた夕焼けは高海市の空一杯に広がり、美しい姿を見せていた。